歴博フォーラム

動物と人間の文化誌

国立歴史民俗博物館
〔編〕

吉川弘文館

歴博フォーラム

動物と人間の文化誌

江苏工业学院图书馆
藏书章

国立歴史民俗博物館
〔編〕

吉川弘文館

歴博フォーラム
動物と人間の文化誌
平成九年八月一日　第一刷発行
編　者　国立歴史民俗博物館
発行者　吉川圭三
発行所
株式会社吉川弘文館
東京都文京区本郷七丁目二番八号
郵便番号一一三
電話〇三－三八一三－九一五一〈代表〉
振替口座〇〇一〇〇－五－二四四
印刷＝藤原印刷　製本＝石毛製本

© National Museum of Japanese History 1997.
Printed in Japan.
ISBN4-642-07736-7

Ⓡ〈日本複写権センター委託出版物〉
本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは，著作権法上での例外を除き，禁じられています．本書からの複写を希望される場合は，日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください．

2600円

はしがき

人類より早くその姿を地球上に現した動物たちは、人類が出現して狩猟採集から今日にいたるまでさまざまな歴史的段階で、またいろんな地域や社会でヒトと多様なつきあいがありました。一九九六年三月から五月まで開催された本館の企画展示「動物とのつきあい」が、このフォーラムの母胎となったものであります。

この企画展示では、私たちの住む日本列島での動物とヒトとのつきあい方を「とる」「たべる」「ならす」「めでる」「あがめる」「おう」「えがく」など、ヒトの行動を表す動詞で分類してその多様な関係を表現してみました。主として日本の近世社会を中心にしましたが、そんなに遠くない近世社会の動物とヒトの関係でも、今日の日本では考えられない動物とのつきあいがありました。もちろん現在に継承するような側面もみられるのですが、この文化の断絶と継承はこれから動物たちと私たちがどのようにつきあっていったらいいのか、さまざまな知恵を教えてくれるのではないでしょうか。

このフォーラムは、こうした動物とヒトのつきあいを、日本だけでなくさまざまな地域で人類学や歴史学の立場から研究されている人たちを迎えて、「動物をめぐる文化」をより深く理解してみよう

と企画しました。とりあげました地域は、日本、中国、西アジア、ヨーロッパ、西アフリカですが、話の主題は食用から愛玩さらに神話や説話に登場する多様な動物たちであります。

ヒトと自然の関係は現在危機的な状況にあるといわれていますが、さまざまな地域の文化や歴史における「動物をめぐる文化」を知ることによって、自然との共存や共生の将来像を考える契機になればと思います。

一九九七年六月二七日

国立歴史民俗博物館
㈶歴史民俗博物館振興会

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

はしがき　小松和彦

動物と人間をめぐる文化　篠原徹…1

基調報告

動物とのつきあい

江戸時代人のイヌとのつきあい　塚本学…18

激動の近代中国
——ブタたちの場合——　武田雅哉…46

西アジアにおける人間と動物　松井健…70

西洋世界の動物観　池上俊一…99

言語表象における動物の寓意
——西アフリカ・モシ社会の事例——　川田順造…131

人間社会における動物の位置

司会　小松和彦　篠原徹
コメンテーター　中村禎里　松井章
原田信男
パネラー　塚本学　武田雅哉
松井健　池上俊一
川田順造

1　アニマル・ライトの思想　170
2　発掘された動物たち　181
3　稲作文化と肉食の禁忌　191
4　人間社会のなかの動物　202
5　食べられる動物、保護される動物　212
6　家畜と野生動物　221
あとがき

動物と人間をめぐる文化

小松和彦
篠原徹

本フォーラムは、本館の企画展に合わせて計画されたものです。この企画展のねらいのひとつは、日本人が動物に対してどのように接してきたのかを、本館の役割、研究活動をフルに活用しつつ、考古学、文献、民俗などの資料を通じて明らかにすることにあります。つまり日本という地域的限定が与えられているわけです。

もうひとつのねらいは、支配者や知識人の思い描いた動物観ではなく、日常の生活から動物を見直してみようという視点で展示物が集められていることにあります。この理由から、「とる」（狩猟）「たべる」（食料）「あがめる」（崇拝）「おう」（駆除）「めでる」（鑑賞、愛玩）「あそぶ」（遊戯への導入、比喩、象徴化）、「えがく」（表現、記録、代用）という、多様な観点から展示がなされています。もちろん、資料は必ずしもそのひとつに納まってしまうものではなく、複数の領域にまたがるものもあります。

また、本展示では、動物のなかで、とくに「イヌ」「ネコ」「サル」の三つの動物が特別な扱いを受けています。これは日本人がこれらの動物と歴史的にも、文化的にも、深いつきあいをしてきたことを物語っています。もしこの企画展に忠実に、主催者がこのフォーラムを計画することに決めたならば、おそらくこの壇上に並んだ報告者は、日本の「イヌ」や「サル」「ネコ」の歴史や習性、人間との関係に明るい研究者がならんだことでしょう。そして近世のイヌの実状に詳しい、このフォーラムの報告者のひとりであります塚本学さんもきっとその一人としてならんでいたことでしょう。当然のことながら、そこでの話題は、日本の動物を中心にしたものにならざるをえないでしょう。もっとも、わたしたち日本人にとって日本に住んでいる動物の方が、外国に住んでいる動物や身近にいない動物よりは、話題に入って行きやすい面をもっています。

しかし、このフォーラムは、今述べました企画展の枠を踏み越えたところに設定されています。このフォーラムの主眼は、日本人の動物観、動物との関係を相対化することに置かれています。つまり、世界各地の人びとの動物観、人と動物の関係のなかに日本人のそれを位置付けてみようというわけです。

といいましても、ここで世界中の民族を扱う時間もありませんし、あまり多くの民族の動物観を取り上げると頭が混乱してしまいますので、ここでは、日本（塚本学）、西洋社会（キリスト教文化、池上俊一）、東アジア（中国、武田雅哉）、西アジア（松井健）、西アフリカ（川田順造）を相対化の焦点に

選んでみました。実は、司会者としては、これだけでも報告者が蘊蓄を傾けられると、話題が錯綜し混乱をきたすのではないかと心配しております。また、副報告者にしてフロアーの方の代理人として、三名の方々にコメンテーターをお願いしています。この三名の方々も、動物については話したいことをたくさんもっておられる方ばかりですので、適切にして興味深いコメントを期待できることかと思います。

さらに、司会の篠原と私も、民俗自然誌と宗教論という立場の違いがあるものの、動物にはとても興味をもっておりますので、適宜、司会の合間に議論に参加させていただきたいと思います。

私はミクロネシアのトラック諸島の離島で調査を行っています。周囲が四キロという小さな島です。ここにも動物がいるのですが、この島民は日本人とはかなり異なった動物との関係をもっています。周囲が海ですので、タロイモ、パン、魚が主食です。食料用の家畜としてはブタとイヌ、ニワトリがいます。しかし、いずれも植民地化してからの動物らしく、きわめて実用的にしか文化のなかに組み込まれていません。

もっとも重要な動物のひとつはウミガメです。それは、ウミガメを獲りに遠くの無人島に命を捨てる覚悟で出かけます。カメは首長の動物であり、首長が分配します。カメは人間に出産の方法を教えたとされています。もうひとつの重要な動物はトカゲです。トカゲは愚かな兄と賢い弟のたとえに使われますし、呪いの道具にもなります。しかしこれを食べることはしません。また特定の母系クラン

はサメ、イルカ、カニから生まれたと信じられています。したがって、それを食べることもしません。人間を食べるようなものだというのです。イソシギの化け物が神話のなかで航海術を人間に教えてくれたことになっていますが、これは平気で食べます。私は日本の動物の化ける能力に注目してきたのですが、こうした動物観を眺めて気がついたのは、日本と違って、動物はそれ自体としては化ける能力はないということです。イルカと人間の結婚を描いた、日本でいう天人女房型の昔話があるのですが、イルカはその皮を脱いで人間の姿になり、井戸で水浴びをしているときにその皮を盗まれてしまいます。こうしたことも、日本人の動物観を照らし出してくれることでしょう。

さて、このフォーラムの成立の経緯や意図については、もうひとりの司会者・篠原からより詳しい説明があると思います。

（小松和彦）

＊　＊　＊　＊

本書は国立歴史民俗博物館（以下歴博という通称を用いる）で一九九六年四月二七日に行われた第二一回歴博フォーラム「動物をめぐる文化」の記録を中心にして構成されたものである。フォーラムは大学共同研究機関である歴博の共同研究や個人研究にもとづく展示などを背景に、一般公開の形式で行われる。そこで本書のもとになった第二一回歴博フォーラム「動物をめぐる文化」がどのような経緯で開催されることになったのかをまず述べてみたい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

このフォーラムの最初のきっかけは、フォーラムの報告者の一人でもある塚本学さんが中心になって組織した歴博の共同研究であった。歴博は博物館を併設する大学共同研究機関であるので、いくつもの共同研究（研究テーマに沿って、いろいろな大学などの研究者に集まっていただき進めていく期限を限った研究）がある。塚本さんを中心に組織された共同研究の主題は「生命観――とくにヒトと動物との区別認識についての研究――」というものであった。一九九〇年から一九九二年にかけて三年間行い、その成果は『国立歴史民俗博物館研究報告』第六一集として刊行されている。

この研究の目的を塚本学さんはその冒頭の論文で、「日本人の生命観を、とくに動物の生命についての感覚との対比によって検討しようとするのが本共同研究の意図であり、基層的なものの考え方の研究の一環としてこの問題を設定する意味があると考えてのことであった」と記している。この共同研究では、この意図にそって日本列島に居住した、あるいは居住している人びとのさまざまな時代や地域の動物観や殺生観が検討された。

そしてこの共同研究の成果が母胎となり、歴博において企画展示「動物とのつきあい――食用から愛玩まで――」が一九九六年三月一九日から五月一九日まで開催された。この展示についての考え方と構想は展示図録として刊行されているが、基本になったコンセプトについて概略を記してみる。それはヒトと動物とのつきあいかたを、ヒトが動物に対してとる行動を示す動詞で分類して提示してみようということであった。「とる」「たべる」「ならす」「あがめる」「おう」「めでる」「あそぶ」「えが

く」という八種類の動詞で展示構成を考えた。これは日本の近世社会のヒトと動物の関係を表すのに重要であると思われる動詞をとりあげたものである。したがって、この動詞による動物をめぐる文化の分類は異文化や異なった時代にはかならずしも適用できない。しかしそれゆえにこそ、これらの動詞の分類をめぐって、異なった時代や異なった地域とどのような文化的差異があるのか明らかにする必要がある。あるいはもっと別の動詞を必要とする文化や歴史があるかもしれない。

塚本さんが研究報告の論文や展示図録で人をヒトと表記している意味は、日本の歴史を広義に捉え、日本の歴史をこの列島で展開した人類史のひとつとして考えようとしているからである。ここにすでに異なった文化や歴史との相互照射の意図が含まれている。

共同研究や企画展示では、日本列島での文化と歴史が中心であった。展示開催中の一九九六年四月二七日に行われた、この歴博フォーラム「動物をめぐる文化」は、現代の日本文化という地平からみれば異時間と異空間の研究者の報告と討論から、日本列島で展開したヒトと動物のつきあいかたの文化を相対化しようという試みであった。このフォーラムの企画立案者のひとりである私自身の期待はそのようなものであった。さまざまな動物をめぐる文化を相互照射するため選ばせていただいた五人の報告者と三人のコメンテーターを簡単に紹介してみよう。

さまざまな地域の、さまざまな歴史のなかの動物たちをめぐる文化に関心をよせる研究者といっても多種多様である。異なる地域として西アフリカ、ヨーロッパ、西アジア、中国そして日本の五つを

とりあげた。この五つの地域をとりあげれば動物をめぐる文化の類似性と差異性の両者を論ずることができるであろう。そして異なる研究の視点、主として歴史学と人類学という二つの分野から研究者を選定させていただいた。異時間と異空間、歴史学と人類学というこの二つの軸は、いうなれば地球規模でのヒトと動物のつきあいかたを眺望することを志向している。歴史学と人類学のあいだに「動物をめぐる文化」という関心の共有と、昨今の社会史や心性をめぐる相互理解の動きがあり、有意義な展開が期待できると考えた。

文化相対主義への疑問が噴出しているが、異時間と異空間の旅人としてフィールドワークを行うものにとっては、現地のあるいは文書の生(なま)のデータから演繹される議論は依然として有意義であろう。そうした時間の旅人として、つまり動物をめぐる文化の歴史学的風景を論ずる人として塚本学さん、武田雅哉さん、池上俊一さんの三氏に登場していただいた。

塚本さんは最近『江戸時代人と動物』(日本エディタースクール出版部、一九九六年)を出版したのでもわかるように、江戸時代人と動物とのつきあいに早くから着目していた。今回はそのなかでもイヌに焦点をあわせ、「江戸時代人のイヌとのつきあい」と題して報告してもらった。

武田雅哉さんは中国文学が専門であるが、幅広く中国文学に登場する実在のあるいは架空の動物についての造詣が深い研究者である。猪八戒は西遊記の人気者だが、中国文化におけるブタを「激動の近代中国――ブタたちの場合――」と題して、清朝末期に民衆のあいだに流布した「点石斎画報」を素

材に報告してもらった。

池上俊一さんはヨーロッパ中世にみられた特異な動物裁判に着目してユニークな著作『動物裁判――西欧中世・正義のコスモス――』（講談社現代新書、一九九〇年）をものした研究者である。古くて新しい問題である西欧社会の動物観の中心テーマ、「キリスト教と動物」の関係をまさにそのタイトルで報告してもらった。しばしばいわれてきた西欧の人間中心主義にもとづく動物支配の図式に新しい視点からの修正を試みている。

そして空間の旅人として、つまり動物をめぐる文化の人類学的風景を論ずる研究者として松井健さんと川田順造さんの二氏に登場を願った。松井健さんは最近はパキスタンのバルーチスターンの農牧畜社会を精力的に調査しているが、広く西アジアの遊牧社会全体にも関心をもっている。その調査と思索から『セミ・ドメスティケイション――農耕と遊牧の起源再考――』（海鳴社、一九八九年）という著作で重要な仮説を提示している。このフォーラムでは「西アジアにおける人間と動物」と題して、イスラームの教えにおける動物の位置と遊牧生活の核となる家畜、人間関係などを論じてもらった。

今ひとりは多彩な人類学的研究で知られる川田順造さんに西アフリカのブルキナファソのモシ社会の口頭伝承や民俗分類に登場する動物を素材に、生活、言語、図像、信仰など多層なレベルでの動物をめぐる文化の意味を論じてもらった。川田さんはその著作『口頭伝承論』（河出書房新社、一九九二年）でさまざまな形で登場する動物から精霊をあつかい、動物をめぐる文化が文化の深遠な部分にま

でかかわっていることを説いている。

これだけ異時間や異空間の多彩な研究者が揃うと、議論は空中分解する可能性がある。そこで歴史学、人類学また民俗学にも通暁していて博覧強記の小松和彦さんに討論の司会をお願いした。小松さんには、想像上の動物であるが、河童や妖怪に関する多くの論考があるのは周知のことである。

共同研究、企画展示そしてこのフォーラムの報告に全てかかわったのは塚本さんだけであるが、共同研究、企画展示の主要なメンバーにはこのフォーラムではコメンテーターとして登場していただいた。

中村禎里さんはもともと生物畑の人で、最近は日本人の動物観について意欲的に取り組んでいる。彼の主要な著作のひとつ『日本人の動物観』（海鳴社、一九八四年）では日本の昔話とグリム童話に登場するヒトと動物の関係の見事な分析を行い、変身譚における彼我の動物観の差異を抽出して含蓄のある文化論を展開した。最近は『河童の日本史』（日本エディタースクール出版部、一九九六年）を出版し、本人の河童研究の集大成も行っている。

原田信男さんは日本中世史の専門だが、日本社会における殺生観や肉食忌避の歴史的変遷を追究している。その成果は『歴史のなかの米と肉』（平凡社、一九九三年）に詳しい。

奈良国立文化財研究所の松井章さんは動物考古学を専門としているが、最近はトイレの考古学の先導者のひとりである。さまざまな時代の遺跡に出土する動物に深い知識をもった研究者である。以上

が報告者五人とコメンテーター三人の簡単な紹介である。

企画展示の構成がヒトと動物の関係を示す動詞群によっていると述べたが、これはヒトの側から一方的に動物と取り結んだ関係性を表現している。現在問題になってきている動物の生存権を認めるという生命中心主義からみれば、これらの動詞はいかにも人間中心主義ということになる。なにも動物は食べられたくて人間に食べられているわけではない。しかし「たべる」というひとつの行為をとっても、さまざまな地域や時代で文化や歴史を内在させていて、これらの理解なくしてはたとえ生命中心主義を標榜するにしてもその内実は豊かなものにならない。

アメリカの異端のマルクス主義的人類学者マーヴィン・ハリスは『食と文化の謎』(板橋作美訳、岩波書店、一九八八年)のなかで「たべる」ことに関する文化の研究を二つに分類している。それは蛋白源としての動物から象徴や儀礼に現れる動物をめぐる文化の研究を、コストとベネフィットの観点から二分するものである。ヒトと動物の関係性を「食べるに適するもの」としてみる研究者と「考えるに適するもの」とみる研究者の二群に分類されるというのである。その伝でいえばおそらく報告者五人もどちらかに偏向していると考えられる。司会者である私は明らかに前者であるが、その意味ではもう一人の司会者である小松さんは後者である。

さて、最後に民俗学を専攻する司会者である私の動物をめぐる文化に関するひとつの関心を述べてみたい。それは報告者のひとりである塚本さんが言及するはずのイヌの文化についてである。私は自

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com